
漆黒

zet

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漆黒

【Nコード】

N4665X

【作者名】

zett

【あらすじ】

神の気まぐれで異世界に送られた柏木竜斗。第1章 冒険者になったリュウト。しかし、早くも様々な問題に出会う。

*初心者なので駄文になるかも、ゆっくり更新していききたいと思います。よろしく願います。

プロローグ（前書き）

初心者なので、お手柔らかにお願いします

ブローグ

それは唐突だった。

キンコンカンコン

「はあ、やっと帰れる」

いつも通りに授業が終わり、伸びをしている俺こと柏木竜斗^{かしわきりゅうと}。
普通のどこにでもいる高校1年だ。

「やっと終わったなあ」

そう話しかけてくるのは親友(?)の和也。まあ、所謂、腐れ縁というやつだ。

「じゃあ、俺は先に帰るから、部活頑張れよ」

そう言いつつ、俺はそいつを見捨てる。和也はサッカー部で何度も俺を勧誘してくる。

「えー、そりゃないぜ。というか、お前もサッカー部に入らないか？」

こんな感じに。

「だから俺は部活はもうやらないって言ってんじゃん。はあ、」
そう言って断る。それは聞いて和也は「なんでだよ・・・」とか言ってる。そう言ってる間に俺はダッシュして教室から逃げ出す。和也がなんか騒いでいるがムシ。

「ただいまー」

俺はそう言って自分の部屋に入る。そしてそのままベットへダイブ！

それが俺の覚えている最後のこっち(・・・)の部屋だった。

気が付いたら真っ白い所にいた。

「はいっ！？ここどこだよ？まずは現状確認だ。学校から帰って自分の部屋のベットにダイブしたと　で、目を覚ましたら周りが真っ白だと・・・意味わかんネエー！！！」

「まあ落ちつけ、青年」

どっからかそんな声がしてきた。あわてて、周りを見ても誰もいない。

「見えないからこのまま話すぞ！。まず、わしは全知全能の神様じゃ」

「・・・はあ、神様ねえ。神様が俺に何の用があるのかね？」

「うむ、お前を今から異世界に送る」

「・・・はあ？」

「ちよつと意味がわからないんだけど」

俺がそう言うと、

「もう決定事項だから変更できないぞ。安心しろ、送る世界の基本的なことは頭の中に入れてやるから、ガンバレー」

「ちよつ、待て。なんで俺なんだ？」

「まあ、わしの気分じゃな」

「・・・死ねよ！神様、最悪だ」

「神だから死ねんぞ」

「・・・しかも心読むな！！」

「じゃ、便利な能力を授けてやるから頑張れ」

そう言われて、俺はそれ以上しゃべることの叶わずに飛ばされた。

——しかし、彼を送ることによる影響をまだ彼らは知らない。

それは全知全能の神でも・・・

プロローグ（後書き）

駄文かもしれませんが、よろしくお願いします!!
誤字・脱字があれば、ご指摘お願いします。

第一話（前書き）

説明が多くなります。申し訳ありません。

第一話

目覚めると森でした。どうやら、あの神とかいうふざけた爺に送られたらしい。

「まあ、いいや。それよりここはどこだ？」

そう思っていると頭の中でいきなり”イスカル皇国 南の森”と出てきた。

「何だこれ！！」

思わず、俺は声に出してしまった。しばらく調べてると、あの神様がこの世界の基本的な情報を頭の中にぶち込んだらしい。

「入れるんだったら、もっと丁寧にに入れてくれよ。頭が痛い」

数十分間後・・・

あれから、頭の中にある膨大な情報を整理すると

エスカルテと呼ばれるこの大陸には

今俺のいる森があるイスカル皇国

軍事力が大陸最大の帝国

獣人が住むクルト国

そして、エマという宗教の発祥の地とされるエマ神国があることが分かった。

100年前までは帝国がほかの国を侵略していたりして、はげしい戦争があつたらしいが今はどの国も不可侵条約を結んでいるらしい。だが、最近は帝国とエマ神国の間にきな臭い動きがあるようだ。

ちなみに、この世界には獣人だけでなくエルフやダークエルフ等々色々な種族がいるらしい。もちろん、魔獣とよばれるものもいるらしい。魔法があり、代表的な属性が

『火』・・・明りや攻撃の基礎

『水』・・・癒しや補助的なもの

『風』・・・水と同じで補助的なものが多い。ただし、攻撃魔法もある

『雷』・・・一番破壊力が高い

『土』・・・防壁などの防御系

『光』・・・所謂、神聖魔法のようなもの

『闇』・・・よくわかっていない

クリエーター

と分かれている。このほかにも創造や時空魔法があるらしい。また、魔法は下位、中位、上位、最上位とランクがあるらしい。ちなみに俺の魔法量は底なし。

「これはチートだよなあ」

思わず、ため息が付きたくなる。

そこで試しに火の下位魔法を使ってみた。ライターぐらいの火が出来ればいいかなあと思って使ってみると拳よりも大きい火球が出来てしまつて大慌てでやめた。

「魔法使えないじゃん！」

そう言つたら、目の前に『初心者でも簡単！魔法制御の方法』と書かれた本が現れた。俺はしばらくその本を見ながら全属性を使つてみた。

「いやあー、やっぱり闇が一番いいな。」

俺がそう思ったのは闇属性の魔法は肉体強化から武器強化まで色々

あつたからだ。

もちろんかつこいいのもだけど。

創造魔法では黒いロングソードを二本と黒いシャツとズボン作った。なぜかというと神様からもらった知識の中に色々な道具と体術の説明があつたから。その中には二刀流のことがあり、同時に俺自身の憧れでもあつたからだ。

「当面の目標は、近くの街にいつてギルドのにでも登録しよう。しかし、メンドクサイ世界に來ちゃったなあ」

俺はそう言いながら森を出るために歩き出した。

第一話（後書き）

上手くつなげませんでした。

次回はギルド登録にしようと思います。

第二話（前書き）

駄作です

第二話

あれから、森を出て、ジグチとよばれる街に向かった。
結果から言えば、街には無事に入れた。

「つたく、あの兵士は頭が固すぎるだろ」

入ったのが夜になる直前だったので怪しまれたのだった。

「何だ！？ 貴様、そんな恰好をして何をしている！！」

「いや、旅人だけど」

「だったら、ギルドカードか、身分を証明するものを見せろ！」

「俺、そんなの持っていないんですけど？」

「だったらこの街には入れやるわけにはいかない」

「そんなー」

などと俺と兵士が言い争っていると後ろから別のやつが来た。

「何をしているんだ？」

そいつがそう言うと言つは

「こいつが身分を証明するものがないと言って、」

そう言う、そいつは

「そのくらいだったら早く町に入れてやれ。」「でも規則が・・・い
いから、早くしろ」「わかった」

兵士は苦々しい顔しながら俺を入れた。

「悪かったな」

俺を入れると言った兵士が俺に謝ってきた。

俺は少しびっくりしたが、

「いや、まさか身分証が必要とは思ってもいなかった。」

兵士は俺の発言に驚いていたが、すぐに笑った。

「そうか、だったらギルドに行つて登録をして来い。ちなみに俺の

名前はギル、ギル・ハーツだ。お前は？」

「俺は……」

俺は一瞬迷った。名前を教えていいのか。しかし

「……リュウトだ」

ギルは頷いて、

「リュウトか。よろしく」

「ああ、サンキュー、ギル」

そう言いあつて、別れた。

これが今までの回想。で俺は今、冒険者ギルドに向かっている。

- - - - -

ガチャツ……

冒険者ギルドの中に入ってみると、無茶苦茶マッチョで^{ツインハンドソード}大剣を背負っている人やダガーを磨きながら笑っている人……まあ、色々な人がいる。それを見つつ受付にいる若い男性に声を変える。

「すみません。登録したいんですけど……」

そう言うと、若い男性は俺のことを見定めるように見ながら

「そうか、じゃあこの用紙に必要事項を書いてくれ」

俺はその用紙に必要事項を書いていく。ん、なんでこの世界の文字が書けるのか？ てもちろん頭の中にぶち込まれてあるからだよ。

名前：リュウト

年齢：18

職業：剣士

属性：水・風

言語：大陸共通語・皇国語・帝国語・龍語・古代語

まあ、これでいいだろう。魔法はあまり目立ちたくないのもで便利な水属性を選んでおいた。書き終わった用紙を男性に渡す。

「へえ、お前二属性使えるのか。しかも水属性か。それで剣士だと便利だな」

「ええ、でもさわり程度ですよ」

「それでも、便利には違いはないだろう」

そう言いながら、笑った

「そうですね」

俺は苦笑しながら頷いた。

「しばらく待つてろ。」

そう言う男性は、奥に引っ込んでしまった。

しばらくして（時間的には5分程度）、戻ってきた男性の手には黄色いカードが握られていた。それを俺に渡しながら

「これがギルドカードだ。そして俺はこのギルドのマスターだ。」

まっ、気軽にマスターとでも呼べばいいさ」

彼が笑いながら俺に言うが俺は驚いた。

「ギルドマスターだったんですか？そんなに若いので驚きました。」

「よく言われるよ」

マスターは苦笑しながら言った

「それじゃ、ギルドの説明をするが、聞くか？」

俺は頷いたのを見て、マスターは説明を始める。

「まず、ランクについてだがランクはF〜SSまである。原則として自分のランクの二つ上のランクの依頼まで受けられる。例えば、お前さんの今のランクはFだ。つまり、Dのランクの依頼までは受けられるというわけだ。まあ、一概には分けられないものもあるんだがな。依頼は色々あるから気よ付けろよ。」

俺はそれに顔を引き締めながら頷く。

「次にお前に渡したギルドカードの説明だ。ギルドカードは最初は黄色だ。ランクが上がるにつれ、緑、赤、紫、青、藍、黒となる。Sになると黒になると同時にその人物の情報をギルドの本部が直接管理することになる。そして、最高ランクのSSになるとギルドカードの縁が金縁になる。理解したか？」

「はい、それで質問なんですけど、Sランク以上の人は何人ぐらいいるんですか？」

「そうだな、氷姫に炎帝、ほかに鋼鉄もいるし……」

そう言ってマスターは顔をしかめながら考え始めた。

「Sランクは二十人はいない。SSランクは十人もいないだろ。」

「案外、少ないんですね。」

「そんなにぼんぼん出ても困るんだが、な」

「まあ、そうですね。」

そう言っただけで俺たちは笑いあった。

「ギルドカードについての説明は終わったとして、次はこのギルドの説明だ。」

このギルドには受付のほかに酒場がある。酒場は、情報が集まる場所でもあるから上手く利用しろ。

今日はもう遅いし、依頼を受けるのは明日にしろ。ちなみに宿は『川のせせらぎ』という宿を使え。あそこは冒険者に評判がいい。じやあまた、明日な。」

「ええ、わかりました。おやすみなさい」

そう言っただけで俺はギルドから出て、『川のせせらぎ』という宿に向かった。

- - -

「いらっしゃい。一人かい？」

宿に入ると、受付に居るのは恰幅のいい中年のおばさんだった。

「宿をとりたいたけど」

「そうかい、じゃ1週間で銀貨一枚と銅貨三十枚だよ」

「じゃあ、二週間で」

と俺はそう言っただけで銀貨一枚と銅貨六十枚差し出した。そして、おばさんから部屋の鍵を貰い、部屋に入り、ベットに潜り込んだ。

そんなこんなで俺のギルド登録の一日は終わった。

ちなみにこの世界のお金の単位は

銅貨百枚で銀貨一枚

銀貨十枚で金貨一枚

金貨五十枚で白金貨一枚となっている。

第二話（後書き）

リュウトがお金を持っていたのは起きたら金貨一枚、銀貨十枚、銅貨百枚が置いてあったからで盗んだものではありません

文才がほしい・・・。

誤字・脱字の報告お願いします。

第三話（前書き）

はじめての視点を使ってみました。

第三話

- - - - - sideリユウト

翌日、俺は外に出て二刀流の型と体術の鍛錬をしていた。

初めはぎこちなかったが、三十分もするうちに滑らかに体を動かすことが出来た。

おかげで分かったことがある。

それは俺自身の身体能力が著しく上がっていることと何の訓練をしていないのに周囲の気配が分かり、自分の気配を殺すこともできるというわけだ。

小一時間やった後に汗を魔法で流し、宿に戻り朝食を食べ、宿を出た。

宿を出た後にやって来たのは、武具屋だ。

ちなみに、今のリユウトの恰好は背中にも二刀を交差させるように装備し、上下は黒のスボンとシャツに黒のロングコート。すべて魔法で強化してあるものだ。そして、右手の指にはあふれ出る魔力を抑える為の指輪がつけられている。
暇つぶしに見に来たのである。

「よお、兄ちゃん」

中にいたのはドワーフのおっさんだ。

「おっさん、なんかいい装備ある？」

「ああ、あんた冒険者か？」

「ああ、昨日なつたばかりだ」

「へえ、じゃあ祝いに内にある装備を一つだけ無料^{タダ}やるよ」

「サンキュー」

そう言つてリュウトは店の中のものを物色し始めた。店の中には防具から武器、アクセサリまである。

その中にひときわ、目を引くものがあつた。それは一見、普通の腕輪なのだが魔力が秘められているのが分かる。

「おっさん、この腕輪つてどんな効果があるんだ？」

おっさんは俺が持つてる腕輪を見ながら

「ああ、それは効果がよくわかんねえんだ。ま、欲しいならくれてやる。噂じゃ、太古の時代に生きていた魔女が封印されてるみてえだが、はつきりとはわからん。」

「ふうん」

――魔女が封印された腕輪が、面白そうだな

リュウトはそう考えると、それをポケットに入れた。そしてスローイングダガーを4、5本買つと今度はギルドに向かった。もちろん、依頼を受ける為である。

- - - -

今、リュウトは南の森にいる。

リュウトはギルドでゴブリンの討伐依頼を引き受け、森にいたのだ
が……

現状 リュウトVSゴブリン100匹以上

「なんでこんなことになるかな？」

リュウトは苦笑する。

それにはちゃんと理由があるのだが、森にゴブリンのコロニー（巣）
があるとは知るはずがない。

そんなことを思っていると叫びながら一斉にゴブリン達が襲ってき
た。

「*+?!&%\$#@=¥」

「*+?<|—||!”#\$%‘*?’」

「チツ！殺すのは好きじゃないんだけど、仕方ない」

そう言いながら、リュウトは襲ってくるゴブリンを二刀や体術を使
い敵の攻撃をかわし、いなし、時に剣や魔法を使い、攻撃し向かっ
てくる敵を倒し続ける。

ザシュッ！！
バキッ！
グチャッ！！

しばしの間、骨や肉が織りなす音に森は包まれた。

「しかし、なんでこんなにいるのかな？まあ、自分の実力を測れたんだからいいんだけどな」

そう言つてリュウトは剣を振り、血糊を飛ばす。そして、チルを取り出し、討伐達成部位を回収する。

チルというのは、モンスターから討伐達成部位を回収する球状の物体のことだ。“集え”と言えば勝手に回収してくれる。

――生き物を殺すつてのはこういう感触か。いくら生きるためとはいえ楽しむことはできないな。

それに殺しても罪悪感はずかしくてこないんだよな。多分、神がこつちに送る時に何かしたんだろ。

リュウトはそう思いながら、自分の状態を確認する。小さな擦り傷や切り傷が多くは無いがある。それは水魔法で治し、血糊を流し、火魔法で服を乾かす。そして、やれやれと思いながら、ギルドに帰るリュウトであった。

- - - sideマスター

——それにしても、久しぶりに面白い新米が入ってきたな。

リュウトがゴブリンの大軍と戦っているとき、ギルドマスターは部屋の椅子に体重を預けながら、考えてきた。

新米は基本的に将来、有能なものになるかも知れないので、ある程度の実力がつくまで、大切にするのが、

「なーんか、あいつ有るんだよなあ」

あいつ、とはもちろんリュウトのことである。

リュウトが常人とは違うことに気が付いている。だてにギルドマスターをやっているわけではないわけである。

「まあ、おいおいわかってくるだろうし、今は様子見か。さて、今日も仕事をしないとな」

そう言っ、机の上にある大量の書類を片付け始めるのであった。

- - - sideリュウト

——俺、悪くないよね？

いきなりで悪い。でもこれは仕方ないんだ。だって信じてくれない

んだもん。俺がゴブリンを100匹以上狩ってきたこと。
よくわかるよ。だって、昨日冒険者になったばかりの人がやれるわけないよね。

というわけで、今俺は受付にいるきれいなお姉さんに必死に説明もとい説得中。そんな風に騒いでいたら、

「おい、どうした？」

奥から、マスターが出てきた。

あれ、なんかデジャブじゃね？前にも似たことがあったよーな？

「いえ、この人がゴブリンを100匹以上倒したなんて言ってるんです。冒険者に成り立ての人が倒せるわけないのに・・・」

「それは本当か！」

マスターが驚いた表情で、俺を見てきた。

「・・・ええ、本当ですよ。」

「あり得ません!!」

受付のお姉さんが俺の言葉を否定してくる。しかも、睨みながら。ちよつと怖い。

「だが、チルの中に証拠は入っているんだろう？」

「はい。でも「だったら、認めるしかないだろう」!.....」

はい」

「あと、リユウト。この後俺の部屋に来い！！いいな？」

「えっ！！わ、分かった。」

というわけで、認めてはもらえたんだけど、なぜかマスターに呼び出される俺。

はつきり言って、面倒クセー

第三話（後書き）

はじめての戦闘シーンを書いてみました・・・微妙ですね。
改善点があったら、教えてください。

次はマスターの部屋で尋問です。では、次回

10 / 13 指輪を腕輪にしました。

第四話（前書き）

マスターの部屋で尋問タイム。さあ、どうなるのでしょうか

評価ポイントがだんだん上がってきました。ありがとうございます。

第四話

- - - - sideリュウト

受付での一悶着の後、俺はマスターの部屋にギルドの職員に案内された。

一体、何を聞かれるのか内心、メツチャ怖い。

そう考えていると、いつの間にかギルドマスターの部屋に着いた。

コン、コン

「失礼します。リュウト様をお連れいたしました」

案内の人がそう言う。すると、

「ああ、入ってくれ」

マスターの声がし、扉が開いた。

そこには厳しい顔をしたマスターが座っていた。

- - - - sideマスター

「失礼します。リュウト様をお連れいたしました」

そう言うギルドの職員の声が扉越しに聞こえた。

「ああ、入ってくれ」

俺がそう言つと、扉が開かれ、顔をしかめたやつがいた。

「では、失礼します」

そう言つて職員は下がった。すると、途端に部屋を沈黙が支配する。どちらも一言も話さない。

部屋にいるのは二人

片やギルドマスター

片や新米の冒険者のくせにゴブリンを100匹以上殺してくるイミフメイの若者

——俺が呼んでおいて話さないわけがないよな

ギルドマスターはそんな事を考え、苦笑した。そして、

「本当にあれはお前がやったんだな？」

そう切り出した。

- - - sideリユウト

——はつきり言っただけ怖い。マスターは話さないし、ギルドの人は部屋を出て行っちゃうし、もう泣きそう。

リュウトの精神はギリギリ

そんな時、マスターがいきなり言ってきた。

「本当にあれはお前がやったんだな？」

「はっ、ハイ!!」

いきなり話しかけられて、噛んでしまった。

それを見て、マスターはげらげら笑い出した。

「はっはっはっ、その様子だと本当にお前のようだな。いやー、面白いわお前

で、実際どんな状況だったんだ？」

そう言われ、森の中でゴブリンの大軍に包囲されていた、と話した。

「よく生きてたな」

マスターは、俺を目を細めて見てくる。

「じゃ、お前ランクDにランクアップね」

「なっ、なんで!!?」

はつきり言っただけ怖い。なんでたかがゴブリンを倒した程度でEランクを飛ばして、Dランクに行けるのかさっぱり分からないからだ。

「いや、普通に考えてみるよ。ゴブリンの大軍に囲まれて、生きて帰ってくる奴なんてほんの一握りのさらに一握りだぞ！しかも、ゴブリンの大軍なんてひとつの軍を組織しながら掃討するもんなんだ。」

「まあ、そりゃ確かに」

言われてみれば、確かにあの規模だと、冒険者のひとつやふたつのパーティーでは壊滅してしまうだろう。

「というわけで、お前のランクはFからDに昇格。おめでとう」

そんな事を言われ、急に部屋の外に出され気が付いたら宿の部屋にいた。

——初めに感じたのが、茫然、次は何とも言えない感情。ここは素直に喜ぶべきなのかその時は本気で迷ってしまった。結局、考えるのも面倒になり、ベットに横になり目を閉じた。

目を閉じてても眠れてないことに気づき、目を開けてみた。

………真っ白な空間がありました

「えっどこっ?」

【ここはあなたの精神世界といたところかな?】

そんな声が聞こえ、いつの間にか目の前に少女がいた。それも美少女。

「えーと、君は誰?」

【わたしは、腕輪の中に太古の魔女の残留思念といったところかな。】

「残留思念?つまり、腕輪の精霊ってこと?」

【まっ、今のところそれでいいわ。よろしく、リュウト】

「あ、ああ、よろしく?それで、なんで出てきたんだ?」

俺がそう言つとそいつは少し考えるような顔をしながら、

【んゝ、あなたの魔力が強くて、眠っていたわたしの一部が起きたんだと思つわ】

と言ってきた。

「んなことがあるのか。」

【じゃ、顔合わせはこれで終了ね。今度までにわたしの名前、考え
として。じゃあね〜】

「ちよつ、待て」

そう言つて突然消えたと思ったら、目の前が真つ暗になった。
そして気が付いたら、朝だった。

第四話（後書き）

ヒロイン（？）登場かな？

どうしようか悩んでいます。主にヒロイン関係
どなたかアドバイスください。お願いします。
誤字・脱字のほうもよろしくお願いします

第五話（前書き）

だいぶ、文章が長くなってしまいました。
申し訳ありません。

PVが3,000オーバー。これからもよろしく願います。

第五話

おはようございます、朝ですよ皆さん。俺の頭がもう事象を理解しようとしてくれません。

だって、【名前考えといてね！】ですよ！！

俺はネーミングセンス無いんだよ。他を当たってくれと言いたくない。

——でも、うだうだしても始まん！！

そう自分に言い聞かせ、朝の鍛錬に出かける。

鍛錬が終わった後は道具屋に行き、回復ポーションや解毒ポーションなどの消耗品などの冒険に必要な物の用意をする。準備が出来たところで、ギルドに依頼を受けに行く。

そんな毎日が二週間続いた。

- - - - - sideリユウト

ある日、俺は薬草採取の依頼を受け、森で探していた。夕方になりかけてきた頃に、やっと集まった。

「なんで、一枚だけ入口の近くにあるんだよ」

そう言っただけから出ようとしたとき、

「きゃあああああああ!!」

・・・なんか叫び声が聞こえたよ。これは行ったら、死亡フラグ立つよなあ。けど、死んだら困るし。はあ、行きますか

そう思い、叫び声が聞こえたほうに走るリュウト

- - - side???

——— なんで? なんでこうなるの? 私はただオーグを狩る依頼を受けただけなのに!

そう思い、前にいる巨体を見ると、腕を挙げ、振り下ろしてくる。

「あ、ああ、ああ・・・」

——— ここで、私は死ぬのかな

もはや、冷静な思考もできない彼女は逃げるという選択も取れずにそんな事を考えてしまう。

そんな時、黒い何かが巨体に横からぶつかって来た。すると、巨体は吹っ飛んでいった。

そして、ぶつかって来た何かが叫んできた。

「早く、ここから逃げろ!!」

- - - sideリユウト

叫び声が聞こえた方向に走ってみると、デカイ何か小さい人影に立ちはだかっているのが見えた。

しかし、その人影は逃げようとせずただ、震えているように見えた。よく見ると、それが少女というのが分かった。

「チイツー!!」

俺は舌打ちをして、体当たりを敢行。すると、デカブツは奥に吹っ飛んで行った。

いまだに震えている少女に

「早く、ここから逃げろ!!」

そう叫ぶと

「あ、あなたは・・・?」

「俺が押さえる!その隙に逃げろ!!」

「でも、「いいから、早く!」・・・わかった。ギルドのみんなを呼んでくるから、死なないでね!!」

そういつて彼女は出口に向かって走り始めた。

「死ぬな、か」

そう呟きながら立ち上がったデカブツのほうを向き、アナライズ『解析』を発動

結果がすぐに出てくる

名称：強化オーグ

体長：3メートル

ランク：B相当

武器：巨木

耐性：物理・魔法ともに8

「強化オーグだと！？ばかな！！？」

普通、モンスターに亜種はいても「強化」とか言うものは存在しないはずなのだ。

また、オーグは普通でかいやつでも2メートルは超えないのである。

——つまり、どっかの誰かさんがこのバカでかいオーグを作ったということか！

まあ、いい。どちらにしろ俺がやるのはこいつを倒すことだ。

そう思い右手の指から魔力制御の指輪をはずし、背中の中を抜刀する。

体には『フィジカルバースト肉体強化』を、剣には闇魔法でコーティングをする。そして、こちらに完全に気づく前に切りかかる。だが、

ガキッツ！！

「なっ！硬い！！」

思ったよりも皮膚が硬く、剣が通らない。それどころか、逆に拳による攻撃を食らう羽目である。

二刀を交差し、ガード姿勢をとり、相手の攻撃に備える。

——重ッ！！

受けた瞬間、超弩級の重さが押し掛かる。瞬間的に力を流し、逃げる。逃がした拳が地面に当たる。その瞬間、

ドカッ！バキッ！

そんな音をたて、地面に5メートル大のクレーターができる。

「おいおい、マジかよ。洒落にならないぞ、これは」

背中から冷や汗が出る。

「ちっ、仕方ない。」

そう言いつつ、二刀を構え

——二刀流 動 式の型『舞』

『舞』は二刀を複数の属性で強化し、相手の周りを高速で動きなが

ら切りつける技。云わば、ヒット&アウェイだ。

リュウトはオーグの周りにある木を飛び移り、蹴りながら、二刀で切り付けていく。

漆黒の斬撃がオーグに吸い込まれ、体のあちこちから血が飛ぶ。

「グオオオオオオオ・・・」

そう叫びながらオーグが手に持っている巨木を無茶苦茶に振り回すが、全くリュウトには当たらない。

そして『舞』が終わり、オーグの背後に立ち、第二波を繰り出そうとしたリュウトを巨木が捉える。

「ガハッ!!」

咄嗟に二刀を交差することでガードしたリュウトだが、威力を減らすことがまったくできずに吹っ飛ばされていく。

「ゲハッ!!ゴホッ、ゴホッ!!」

何本もの木にぶつかり、地面に叩きつけられると口から血が2、3滴地面へ垂れて行く。

――まずい。直撃でもないのにこの威力は非正常にまずい。絶対に直撃は避けなければ。

そう考え、こちらに向かってくる巨大な物に向かって風魔法を詠唱する。

「風よ、我が敵を切り裂け『ウインドカッター』」

だが、『ウインドカッター』は相手の皮膚に少し傷を付ける程度に終わった。

「ゲッ、マジかよ」

そこでリュウトは次にオリジナルを使った。

「我が障害を叩き潰せ『ダウンバースト』」

相手ごと空気の塊で押しつぶそうとしているのである。

これにはさすがのオーグも膝を地面につき、動きが止まった。

すかさず、リュウトは魔力を供給しながら足を大きく左右に広げ、腰を落としながら右の剣を上段に、左の剣を下段に構え、技を繰り出す。

——二刀流 激動 終の型『天地震撼』

地面を蹴り、上と下から漆黒の斬撃を放ち、次に左右から放つ。
上、下、右、左、斜めなど数多の方向から斬撃を放つ。

第五話（後書き）

『アナライズ解析』と『ダウンバースト』はリュウトのオリジナル魔法です。
『アナライズアナライズ』は相手の特徴から弱点までを把握することが出来ます。

『ダウンバースト』は相手とその周囲に対して、空気を塊として落とし、重力のように押しつぶそうとする魔法です。

第六話

- - - sideマスター

リュウトが強化オーグと戦っているとき、ギルドは慌ただしくしていた。

理由はもちろんリュウトが助けた少女——キナがギルドに助けを呼びに行ったからである。

事情を聞いたギルドマスターは手の空いている冒険者たちを招集した。リュウトを助けるための部隊を決める為である。

「まず、依頼を受けている奴以外はここに残ってくれ」

ギルドマスターがそう言うと、半数ぐらいの冒険者たちが残った。

「次は、Bランク以上の冒険者がチームを組んでいるもの。そして、^{ヒーラー}治療師は残ってくれ。」

そうギルドマスターが言うと、チーム全員がBランクのチーム『^{くれない}紅』とヒーラー数人が残った。

「そろそろ、理由を話してくれてもいいんじゃないか？マスター」

そう言ってきたのは、『^紅』のチームリーダーであるハギ

「ああ、そうだな。」

「さっき、キナがギルドに慌ただしく入って来たのは知っているな

「？」

そう俺が言っと、何人かの冒険者が首を縦に振る。

「それとこれがどう関係あるんだ？」

「どうやら、とてつもなく強いモンスターがいて全く歯が立たなかったらしい。そして死に掛かっているところをリュウトに助けられたらしい」

俺の言葉で冒険者たちが騒ぎ出す。

「それって、ソロでゴブリン100匹以上を倒したって言われてる新人か？」

ハギでさえも聞いてくる。

「ああ。そこで、だ。そいつを助けに行ってもらいたい。頼む」

「わかったよ。助けに行けばいいんだろ？お安い御用だ、そうだろお前ら？」

「「「おう！」「」「」」

そう言って、ハギ率いる救助隊はギルドを出て、森に向かって行った。

「間に合ってくれよ！」

思わず、そう言っていたことに彼は気づかない。

- - - - sideリュウト

「はぁ、はぁ、・・・クソ！」

今、リュウトは木の陰に隠れ、呼吸を整えている。

体には無数の傷がある。そのなかでも、右腕を縦に走る長い傷が一番ダメージを与えているように見える。その傷は、『地震撼』を使っているときに不意に來た相手の爪に気づかず、受けてしまった傷だ。

この傷で右腕は剣は持てるものの、振ることはできない状態だ。

—— チツ、慢心してたな。楽に倒せると思っていたが奴さんは簡単には勝たせてくれないみたいだ。

—— こちらももう体力が少ないし、この状態ではこれ以上魔力を使うのは危険だしな

—— どうする？こうなれば、賭けるしかないか

そう考え、木の陰から出てオーグの前に姿をあらわす。

「グルルウルルルルr・・・」

「そう怒るなよ。もう終わらしてやるよ」

そう言うのと右の剣はだらり、と下げ、左の剣を正眼に構えありつたけの魔力を注ぎ込む。そして、一気にダッシュをする。

「うおおおおおおお！ー！」

「があああああああああ!!」

そう叫びながら、交差するふたつの影
そして、片方は膝をつき、片方は肩から腰にかけ血を噴き出しなが
ら、前のめりに倒れる。

「つら・・過ぎる・・だろ？」

息絶え絶えに言うのは膝から力が抜けたリュウトである。魔力を限
界ギリギリまで使ったので視界が回り、気持ちが悪い。

そんな風になり、仰向けで倒れているとガチャ、ガチャという音と
共にどなり声が聞こえてきた。

「おい!! しっかりしろ。チツ、ヒーラー、こつちだ。傷がヒデエ
!!」

そんな声がかけられるなか、徐々に暗くなる意識の中でこう思った。

—— おせえよ、もつと・・は・・やく・・に來い・・よ

それを最後にリュウトの意識は黒く塗り潰された。

- - - - side???

帝国某地の一室

黒装束を身に着けた人影が背を向けている貴族と思われる男に片膝
をついている。

「申し上げます!!」

先ほど、イスカル皇国に送り込んでいた強化兵がやられたようで

す」

「何！それはまことか？」

「は！！！」

数時間前より通信が取れなくなっておりますので・・・」

「そうか・・・一体何者が？」

「それにつきましたは、わかり次第ご連絡を！」

「うむ、下がってよいぞ」

男がそういうと、黒い影となり音もなく消えた。

「ふむ、一体誰がしたのか」

男はそう呟きながら、視線を虚空に漂わせていた。

——この時、すでに大陸は激動の時代に入りつつあった。
しかし、まだ誰も知らない。そう、だれも・・・

第六話（後書き）

次は精神世界から始まります。

その後はヒロイン登場といきたいです。

第七話（前書き）

しばらくぶりの精神世界です

第七話

- - - - - s i d e リユウト

目が覚めたら、見知らぬ天井でした、なんてことは無く、よく知ってる真っ白な空間と二週間ぶりに会う美少女がいた。

【久しぶり。二週間ぶりぐらいかしら？】

少女の鈴のような声が言う。

「ああ、そのぐらいだな。ところで、今度は何の用だ？」

【名前を考えてくるっていう約束を忘れたの？】

「いや、でもあれはおま【でも、約束したでしょ？】・・・はあ、わかったよ。」

【そう、で私の名前は？】

「ルナ」

【『ルナ』いい響きね】

ルナがそう言うのと、急に体が大きくなった。その容姿はだいたい、十六歳ぐらいだ。背は160センチぐらいだろうか？胸は――
―ゲフンゲフン、まあそれなりについておこつ。
それに驚いた俺は、

「なんで、いきなり大きくなったんだ？」

【そりゃ、名前を貰ったからじゃない】

「そういうものなのか？」

【そういうもののなの。ところで、あなたのいた世界では『ルナ』という名前はこういう意味があるのかしら？】

「なっ！！な、なんでその事を！？」

俺は驚きながらも聞き返す。

【だってここはあなたの精神世界よ。自分の主の事情ぐらい知っていてもおかしくないわ】

「・・・さいですか」

そう言われちゃ納得するしかない

【で？】

「ああ、『ルナ』っていうのは月を表してたと【自信ないんだ】・・・悪い」

うる覚えの知識なので責められても仕方がない。

【じゃ、こんどからは念話で。これからよろしくね、リュウト】

「ああ、よろしくルナ」

俺たちがそう言つと、急に視界にもやがかかったように周囲が白くなる。そして、そのまま何も見えなくなる。

目を開けると、そこは知らない天井だった。

「うつ、ここは？」

体を起して周囲を見ると、病室のようだった。

しばらく、体を起こしているとギルドの職員と思われる人が部屋に入ってきて、

「あら、やっと起きたのね。心配してたのよみんな」

「ああ、すいません。ところで、魔法制御の指輪ってありますか？」

「指輪？いいえ、なかったわよ。というか、君の体から魔力はこぼれてないわよ」

俺の問いにそう答え、彼女はそう指摘する。

——じゃ、もういいか

そう思い、次の質問をする。

「ところで、今ってあれからどのくらい経っているんですか？」

「あれから3日は立っているわよ。ちょっと待ってね。今、マスターを呼んでくるから」

そう言うと、彼女は部屋を出て行った。

「3日かよ」

思ったより長い時間眠っていたことが分かり、啞然とするリュウトそのまま茫然としてると、部屋の扉がいきなり開きマスターが入って来た。

「おう、生きてたか」

- - - sideマスター

リュウトがギルドの病室に寝かせた後、マスターはすぐにギルド本部に連絡を入れた。

本部はすぐにSSランカーの調査員を派遣してくれるとの事で、一安心はできた。

あれから3日、

「そろそろ、着く頃か？」

そんな事を言いながら仕事をこなしていると、職員の一人が入ってきてリュウトが目覚めたことを伝えてきた。

「わかった、すぐ行く」

そう言っただけは今持っていた書類を片付けると、あいつが寝ている病室に行った。

「おう、生きてたか」

そんな言葉と共に部屋に入ると、啞然としている奴の顔が見えた。

「はっはっはっ、なんだお前、その顔」

俺は面白くて、思わず笑ってしまった。

それを聞き、奴は

「いや、あれから3日もたっているんだなあと思ってさ」

「ああ、なるほどな」

—— なつとく、なつとく。

ま、起きたら3日たっていますと言われたようなものだからな。

そう思い、意識を切り替える。

「ところで、あの件に対して本部が腕利きの調査員を派遣してくれることになってな。もうまもなく来ると思う。そのことを知らせに・いや、忠告しにきた。」

マスターの言葉を受けて、リュウトの顔が若干こわばる。

「一体なんの？」

「お前は当事者だろう」

「まあ、そうだな」

「そこで色々聞かれると思うから、覚悟しておけ。いいな？」

「ああ、分かった」

リュウトが分かったことを確認し、席を立とうとしたとき

「マスター、ここにいたんですね」

凜とした声が俺の耳に聞こえてきた。

第七話（後書き）

誤字・脱字ありましたらお願いします。
感想もぜひ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4665x/>

漆黒

2011年10月27日00時51分発行